

田中成之『改革の技術』を読む

地方財政や地域政策の講義のなかで、公共事業と地域開発の問題点について映像を使って話すことが多い。リゾート開発に典型的だが、無駄と言えるような公共事業や地域開発の映像がつづく、学生からは対照的な事例や公共事業改革の実態を知りたいという要望が出される。

こうした学生の要望にこたえて紹介するのが、府県レベルでは田中康夫長野県知事による「脱ダム宣言」をめぐる動き、それと片山義博鳥取県知事による公共事業改革である。毎日新聞鳥取支局に勤務していた田中成之記者は、岩波書店から04年11月に下記の本を刊行した。鳥取県の公共事業や予算などの改革、片山知事の「挑戦」をフォローするうえで参考になる。先のレポートで地方財政学会における片山知事の発言をすこし紹介したが、もう一度この本から改革のポイントを示すことにしよう。

本書は第1章「情報公開は精神衛生にいい」から、終章の「片山県政のゆくえ」までの10章で構成されている。第2章の「負の遺産の相続放棄」では、就任して引き継いだ巨額の負債を情報公開などにより、各個撃破していく過程が描かれていて興味深い。前知事が残したハコモノによる借金総額は638億円もあり、事業見直しにより負の遺産の相続を放棄していった。



もちろん議会とのあつれきを伴ったが、そこは知事の采配が勝った。

それと第7章の「進む財政改革 脱どんぶり勘定宣言」では、片山知事による改革の具体像を知ることができる。とくに関心を抱いた点を箇条書き的に記しておく。「予算こそが行政評価」「新規の公共事業を1件ずつ査定、現地視察」「予算編成作業のペーパーレス化」「財政課長査定からネットで公開」「総合計画の廃止」などだ。また、「借金を助長する地方財政制度」に鋭いメスを入れている。

(6月19日 記)